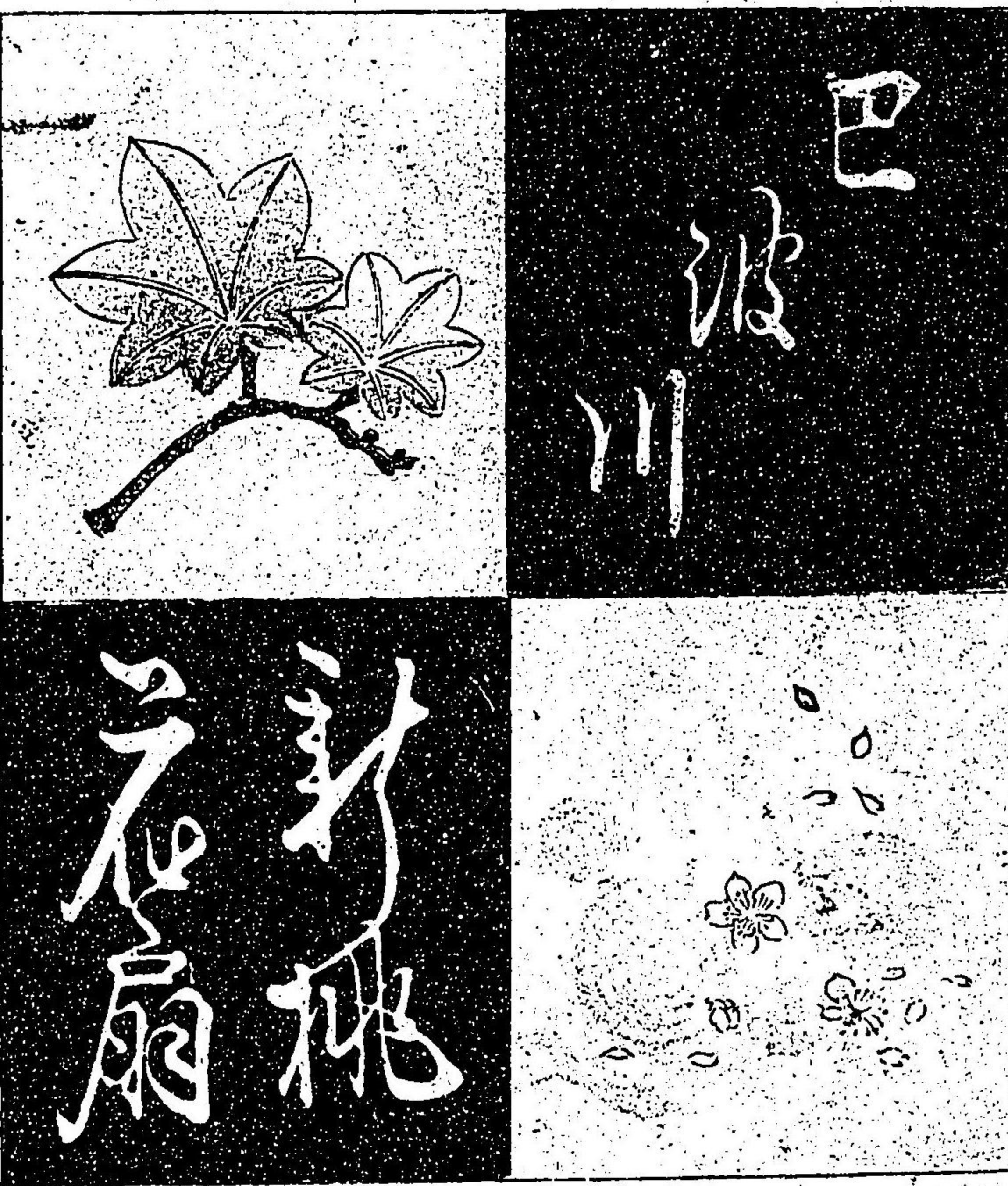


新著 百種 舞外



094166-000-3

913.6-09765s

新桃花扇・巴波川

尾崎 紅葉/著

M23

DBQ-1648



新桃花扇

巴波川

913.6Q9765A

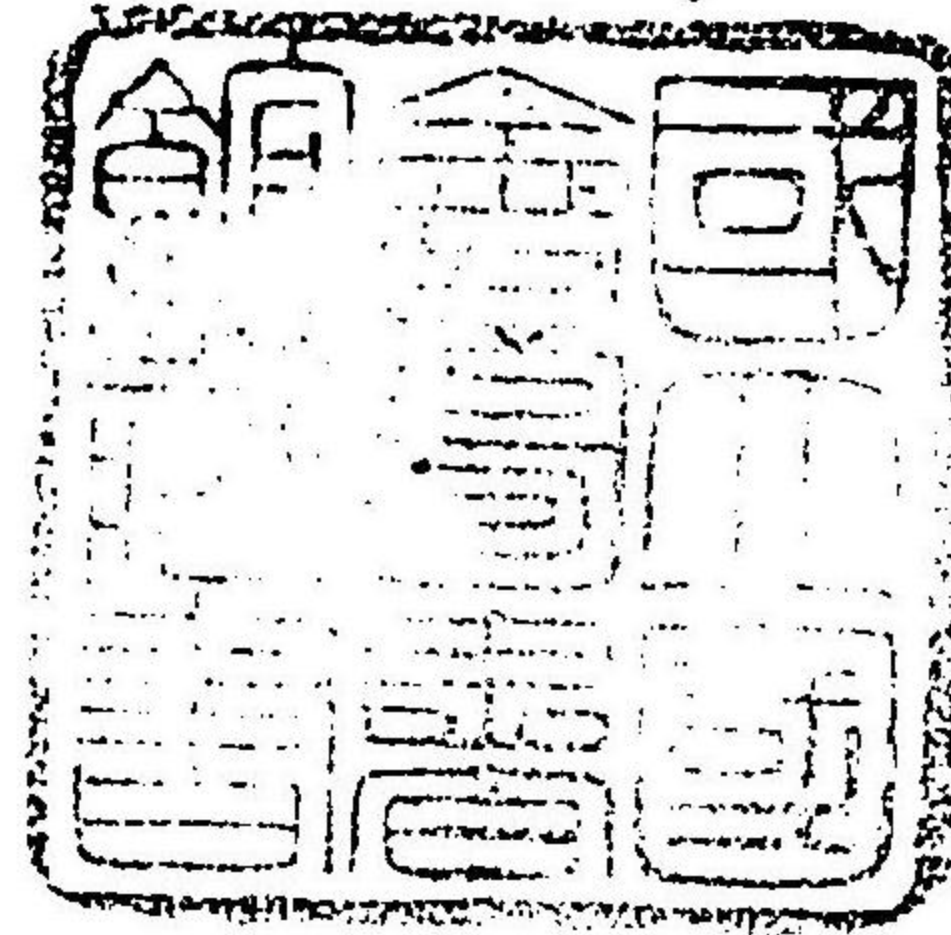
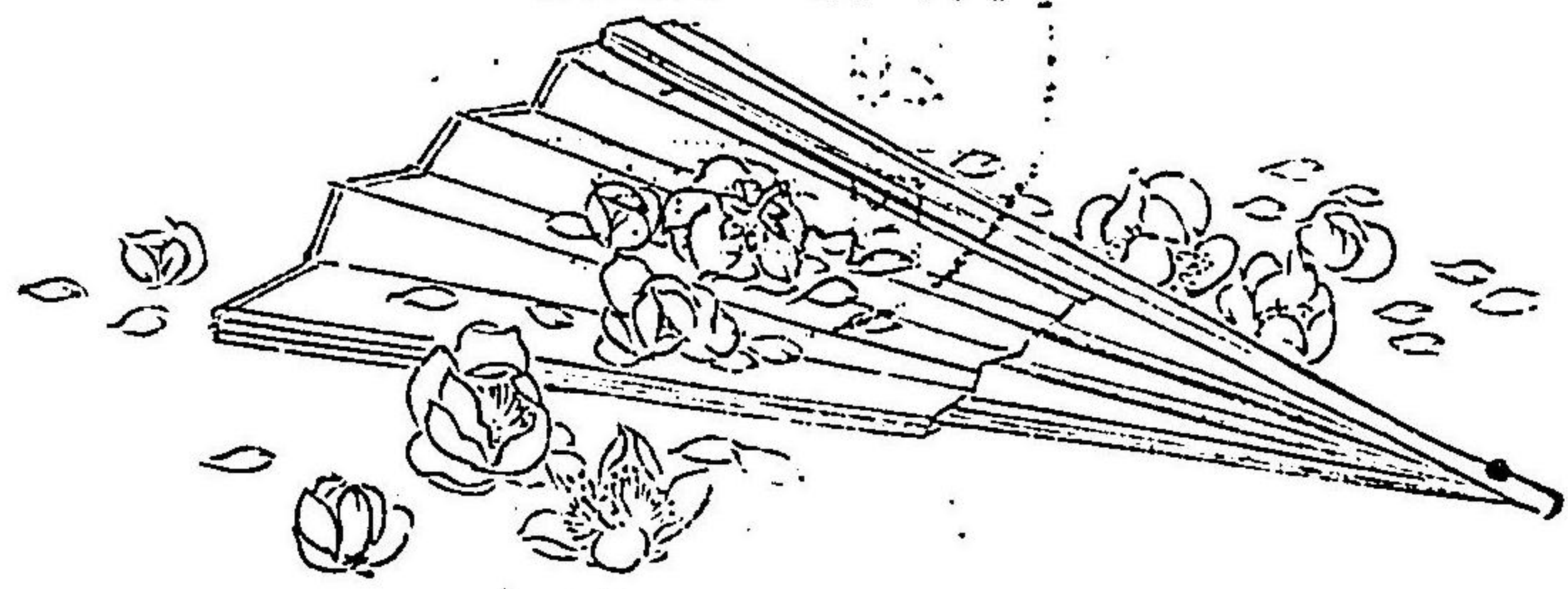
新 桃 花 扇

新桃花扇

紅葉

山人

過にしむかし語今はかゝる馬鹿ものな
 し。わが祖父一歳京都一見の折から東山
 の月に浮れての歸路四條通りを過ぐれ
 ば古道具の露店夜燭の星を列ねたるに
 此所い名にし負ふ九重の帝都場所がら
 とて小町が草紙洗の區もや耳など缺け
 て雨晒の木地のまゝに疎まれ其所等の
 隅へ投遣りてあらむも知れずとそゞろ



新
 桃
 花
 扇



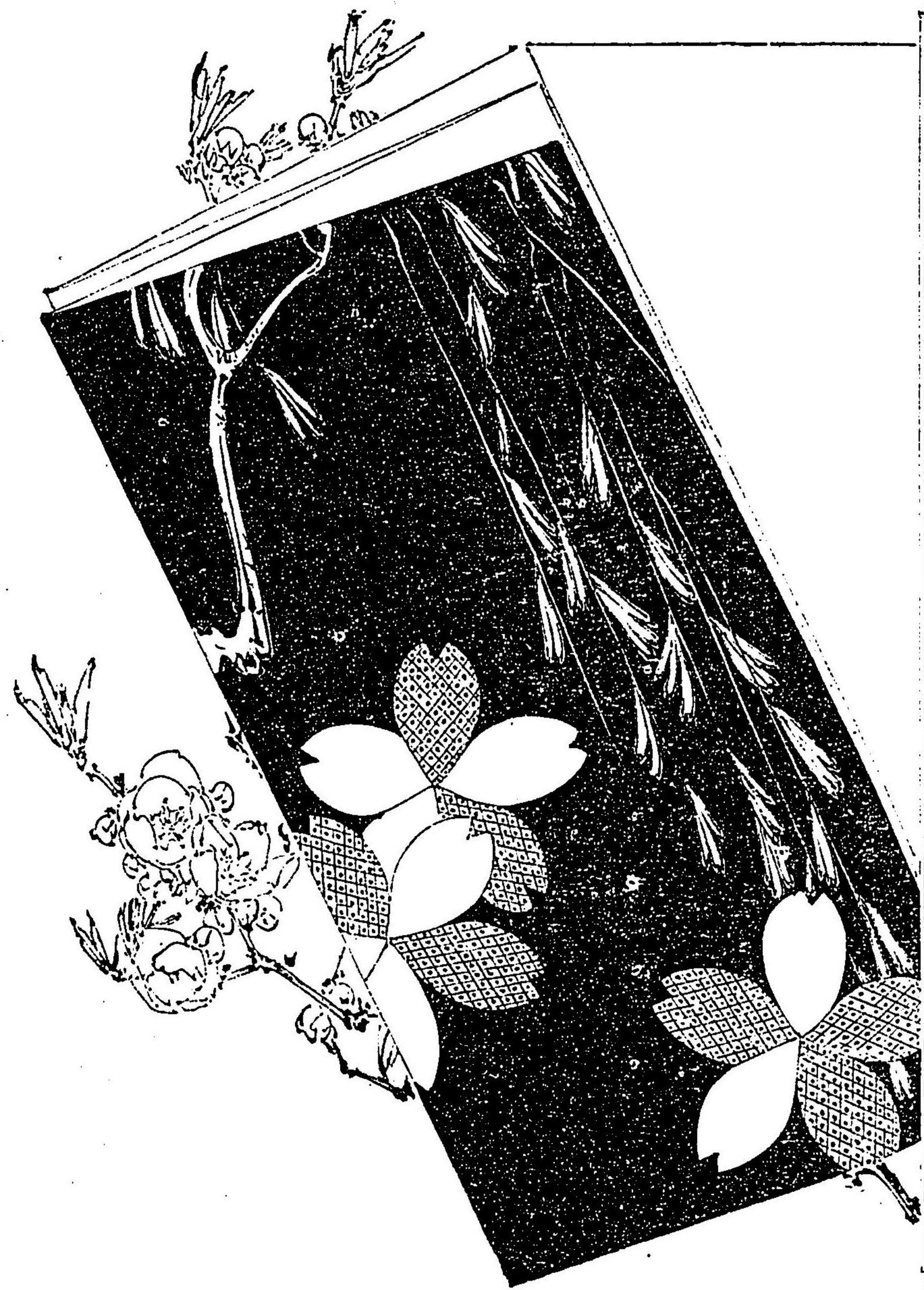
337620

に掘出心出で、木彫の羅漢めける老夫が店に佇みて鶴
 目を睨れど、何所にもあるものは錢もらひと敏捷漢にて、
 かうとひねりたる物も見當らざりき。書畫の好みて少し
 の眼も開きたれば、古手本反古の巻物の中に交れる袖珍
 の帖一折引出して視れば、媚かしき友染縮緬の表装、角の
 磨れて裏面の剝きたるごとく破れたるを、馬鹿くしき
 ものとは思ひながら異りたるものと抜け、地の白繪子
 に小さく扇の地紙形に截りたる奉書を、一折毎に全面一
 面に貼付け、それに畫もなく字もなく、地紙一葉に七ツ八
 ツほごづ、大小打交ぜ、桃の花瓣を散らせるごとく、形も

大略それほどなる胭脂の痕あり。一瓣毎に十四、廿五、三
 十、四十六、十九、二十一など、小書をしたり。異なるものと思
 ふばかりにて更に解せず、數へて見れば地紙兩面にして
 一百枚あり。奥に年號月日もなければ持主の姓氏も見
 ず。いかにしてても會得かざれば何ぞと老夫に尋ねけるに、
 渠も一向に知らざるよし。由來の不解ねど餘りの不思議
 さに買取りて江戸に持還り、目出度歸國の祝賀にと、知音
 五七名を招きて小酒盛の席に、知恩院の鐘、祇園の花、銀閣
 寺の庭、加茂の社の噂よりも先かうした珍らしきものと
 そあれ。諸君の内にて正鵠といふ所を極めたまはむ御方

新著百種外

には、羅生門通にて拾ふて戻りし鬼の小指の生爪を進じ
申すべしと、柱に掛けたりし頭陀袋をとりぬろせば、坐中
にて雑學博覽病の俳師柴門坊柳五、腰なる紙袋留の竹如
意を抽きて斜に搦へ、見ぬ前なればいかる珍品奇物か
知らねど、かくいふ柳五が坐にあるからは迂濶なる放言
なしたまひそ。而て事もな鬼の爪の恩賞は望まねど、御
秘藏の宗祇が髯の拂子が欲しうござると居丈高になれ
ば、祖父の恐るゝ色なく、何も御所望次第、さりながらもし
御鑑定疎忽ならむには？ 此杯洗にて三盃戴き、即坐に
獨吟五十韻をお目に懸くべし。是は一段の餘興。お蔭を



扇 花 桃 新

以て飲めますると、一同崩れし膝を正して危坐る中へかの帖を差出せば、額をあつめて之を披き、孰も呆れて面をぞ見合ひせける。柳五一人澁面装り、子細らしく拱手して控ふるを、所望といひし拂子を持來り、疾々お持歸りをと目前に衝着くれば、閉口して頭を叩き、われいまだ嘗て學ばざるなりといふがまゝに、杯洗を執てたてつゞけに、漾々三杯傾くれば、太息をも吐かせず、紙硯をふしつけ、題は何帖、發句は何と？五十韻々々と疊を拍つて追れば、柳五仆れて海鼠のごとくなりけり。

此事名高くなりて、一見所望の人士多かりけれど、誰判す

る人なくて久しく其まゝに過ぎぬ。

その後或席にてまた此事を發言しけるに、つまといふ其家のれ針の老女が襖越に聞着け、拜見願ひたきものと切に請ふてやまざるの奇なり、詮議の端緒ともなりなむかと、即坐に取寄せて見せけるにつく、表装を吟味の上、縁披きて半過ぐる頃にあつといふを聞尤め、何事ぞと訊へば、はづかしながら是が私のでござりますと、一ツの花辨を指して答へぬ。其が其方のとは？ されば、この持主の下嵯峨の豊様。これは其人の契鑑とて常に懐中せられし品なるが、かく數ある紅きもの、豊様が一度にても契

を籠められし女人の唇朱にて、側に小書の數は銘々の年齢なり。豊様は有徳なる木綿店の二男に生れ、性來多病とて下嵯峨の閑寂なる寮に若陰居の、容姿優れて麗はしく、まかも實意深く散財よく、諸藝にも暗からぬといふに、京の女人といふ女人は黒白の差別なく先方より泥みて、雨とふる濡文は日毎新らしく紙衣にして着らるゝほどの男冥利は、とても此後の世にない事。好月日の下に生れつきたるわが一生の思出に千人の女人に契を籠め、死して戀の諸願成就の明神ともなりたやと、やがて此帖をつくりたまひしに、第一は島原の沙路太夫十九とあるぞ

かし。太夫これを冥加に思ひて、その夕被たりし襦袢の袂を裂きて、この表装の勸進につきたまひたりしとかや。これを始めとしてあるとあらむる女人の品々に逢ふては、かならず唇朱を移させ、其を數取にしたまひて樂しみけるに、行年三十二才を一期として本願成就に及ばず、其數をたしかに九百九十一人、殘る九人に思ひを遺して身没りたまひきと語りぬ。

まことに唇朱の數つまが言葉のごとし。扱へ其方も訂契の一人か。どれ何所に？　こゝに十四と書いたるが私のなり。一生忘れぬ男子よなど背を拵てば、あゝこの老

女をれ手暴な、咳氣がねこりまずと、色も香もあき挨拶。それもろの理か、四十餘年前に男子へ先へ往かれたるものをと大笑ひして、やがて老女が言葉のまゝに契鑑と題して、久しく長持の底に秘めたまひたりしが、祖母の堅人にてかゝるものゝ子孫に毒を遺さむことを氣遣ひ、祖父卒去の後石をつけて墨田川の底に沈めぬ。彼を啖ひたらむ魚の鱗こひにやなりつらむと、親父が一代の秀句。

川 波 巴

巴波川 尾崎紅葉

上の巻

わが友青木某此一事は
 神にも親にも秘めど子
 細ありて我一人に語り
 き。一昨年の暑中休暇筑
 波へ登山して麓を早發
 に、栃木へ廻れば其日は
 暮れけり。旅店を求めけ



るに囊中乏しければ、大構の店を餘所にして某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛入れば、四十恰好の女房背戸の風呂に、柴を烟らせたりしが客と見て出來り、挨拶たらしく洗足の水を汲り、疲れて氣力なく上り框に腰を据ゑたる、青木が草鞋を解かむとすれば、颯と涼しく吹來る風にふまゝと音して柴の焚上るに驚き、鳶よくと喚起てあがら小股走りに行きけり。

梯子下の黯淡所にあいゝと聲嬌饒しく、やがて立出でゝ、お入來なされましと小腰を屈め、お瀝ぎまうしましよと草履を突懸けて青木が前へ廻り、引上し褌を袂みて盥

越に屈み、油掃除を致してをりましたればと兩手を嗅ぎて、何ともござりませぬ、おとりまうしましよと草鞋を解捨て、砂まぶれの靴下を脱り、汗ばめる脚半を解き、氷のやうなる冷水に剃きたる足を跌高に浸して、指の股まで洗ふてもらふ快哉なるほど地方の人が東京の旅籠屋を不深切といふも道理こそ、木賃類似の安泊たにかうした丁寧なる待遇、茶代なしでは勿躰なし。女人は帯に袂める手拭にてやはくと拭ひ、お上りおされまし、御案内と驅上り、手早く行燈に火を移して引提げ、踐めバ櫓を盪まこどく鳴る梯子を昇れば、二階は二間なり。表坐敷にても裏に

てもお好み次第。裏は田畝の様子風通しよかるべしと、肩に懸けたる革包を抛出してどたりと倒るれば、柱も動くに駭けば女人笑ふて、家が古うござりますゆゑと行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる時、始めて其顔を見れば！やゝ、此所は魔窟か、此奴變怪か、凄いはどの美色。火影を眩やがりて織むる眼波に、何も言はれぬ情思の籠れるに、女色には鈍き青木もしみくゝ感して、心魂脱けたるごとく憫とその顔に瞳を凝らせば、女人は振向き様に合はせ顔を微紅めて俯きあがら、只今お煙草のお火をと、小聲に言捨て、逐はるゝやうに下りけり。

青木は手を組みて鞞むる肩の下よりきつと壁を睨み、此女の正體何と判断に苦しむ、安宿に過ぎたる女人、過ぎも過ぎたる美色、栃木町にも……縣にも過ぎたる美色、いやゝ下野、下野はれろかな事、都にとてもあるまじき花艶、下女か女子か、淫賣か、其にしても此にしても過たる容色。我心には措かじと暫ひし迷信發りて、一笑に付したる聊齋志異、剪燈新話あどの怪談を憶ひ合はせ、理外の理のなきにも限らざる妖怪などにてあらむも知れずと、虚心に復れば我ながら愚痴なる分別の出づるも、意外の顯象に感へる心の曇なり、迷信なりと悟らむか、悟ればかゝる

家に眞人間としてかゝる美人のあらむこそ、妖怪にてあらむよりいよゝ奇異なれ。此地にはそよとも淫風吹かずとも聞かざりしに、ざりとて良家の娘子ならば知らず、見れば夕暮の町にむらがる淫行男子が狝弄までたくべきか。其より優れるにしても多錢人面の河瀬が餌物にならざる理なし。ざるを其等に襲されたる臭味もなく、言語に此國の訛はあれど、噪がしからねばさしては鄙びず。舉動は娼柳のわづかに風を知る風情の幽婉。想ふに壬生藩士の落魄などにて武家氣質の義すくめに當世には立交らふ方法なくて、かくはあり果の安旅籠を渡世とすれど、

むかしのまゝに崩さぬ家庭の嚴格なれば、廢垣の野花をも鳥啄み落す事なく、枝頭の春色ひとり盛なるにや？ 確然にうれと小膝を拍て、變化にても淫賣にてもあきになづ胸穩まれば、遽然ゆかしく暮はしく覺じて、この家外に下女のありとも見えず、晩飯の給仕はあの娘子に極まれ、其時風采容顔思ふまゝに觀察くべしと、疲勞も空腹も忘れて、その事のみ思ひ續け、そはくとする氣休に様子を観かむと徐と立て忍足の二ツ目に、何やら母にいふて娘子の昇りくるにあつて、座に還り、何喰はぬ顔して用なき草包を拵くれば、そのまゝ頭壓るゝごとく重りて上

らず、觀察！と思へどなほ重りて上らず。娘子は木根の煙草盆を青木の前に直して、只今そぐに御飯を立て行くと思へば、軽く頭上りて意氣地なくも後姿を見れば、瘦肩細腰、頸の附根の花車なる事。今度の決然真向になつて十分見むと、一服吸ふて心魂を落着け、二服吸ふて勇氣を養ひ、今度は必然見むとの誓の三服目の半頃にもた來り、上口に手をつかへてゐる風呂をめしますか、直に御飯にいたしませうかと顔を見合へば、頭また重りて下俯きあがら、風呂をと手拭を握むで立上れば、此方へと先立つ娘子に跟て下ながら、無念あまた見損じたるかと其のみ思ひ詰

めて、心入らざる足下に一段とたりと踏外せば、娘子はあれと驚きざま三段すべり墮つるに、さらぬだに鳴る梯子は百雷の響きに奥より女房飛出で、お怪我はござりませぬか、お蔭氣をたつけ申さぬか。あいゝ。どうも遊ばしませぬかと勅はられて、青木顔より火のぞるほご面目なげに、どうもないゝと口早に答へて案内のまゝに行けば、家内が居間の闕外に古座を敷き、此へに脱ぎなされてあれへと脊戸を女房指せば、お蔭は客に草履を揃へてこれのは先に下立ち、此方へと湯加減見に走り行きけり。青木脊戸に出づれば、南瓜島の側なる野晒の水風呂に

溢るゝばかり湯沸き、た葛は襦袢になりて脛高に襦袢を褰
 げ、いそがしく風呂側の小樽に水を汲入む姿を湯中より
 眺むれば、頭巾と薄くらはがりは女の顔の特に美しく見
 るものとして、玉のやうなる色白闇を破つて際しく、
 眉目の鮮明には見とれぬあたりは無量の美あるごとく
 覺にぬ。

ざつとれ流しまうしましよといはれて、念のいり過ぎた
 る待遇と薄氣味悪けれど可厭にあらす。濟まねざつ
 とにて好ければと手拭を渡し、風呂を出て床がりの敷
 板に背を向けて屈めば、た葛は丁寧に手拭を畳み、やはく

と垢を掻く手の觸るゝ處は、玉を磨するか、羽二重を當つ
 るか、油を塗るか、ぬらめくばかり滑かある心快は、肉をた
 くど蕩けむとせる思ひあり。青木はつひに覺にぬ嬉し
 さ三分は、七分の羞しさに勝れて身を締め呼吸を塞め、好
 まぬではなけれど長くかうしてあるべき心持あく、折々
 首を擧げては禮を述べてやめさせむとすれど、はいく
 とばかり應へて容易に放れず。やがて吹さらしの風に温
 の微暖とれて、冷亘る肌さはりに驚き、一杯湯を浴せてこ
 めるりと。

夕飯の膳に坐れば、た葛給仕に出たり。驚破！觀察の時、到

れりと青木は十二分の勇を鼓し、かくぞと行燈の火口を
 其方にさし向け、我はその蔭になるやうに用意したれば、
 娘子の髪際まで敷ふべく鮮明に見らるゝを曠がまじが
 りて、顔をそむけ體をひねりて、所剃のため塗の飯櫃より、
 糝糠まじりの冷飯を盛る杓子さばきのにほやかさなる
 はど小笠原流とい彼所なるべし。我顔の黯所にあるを機
 會茶碗を口ににしてさりげなく眼を配れば、瓜核の薄肉頤
 に細れどふくやかに骨を裏み、舊時は美相の一ツなりし
 垂唇まほらしく、臉に少しく腫ありで睫毛長く、瞳は纖々
 と睡むげにして常に微笑あり。艶かなる瞳子の運動敏捷

巴 波 川

くして左に動くも右に動くも、それくの情を含みて無
 味なる眼波あし。髪際はさながら一筋づゝ晝けると思は
 れて、細く、黒く、長く、濃き髪を手束の銀杏返に結び、油垢に
 染みたる木櫛の鬢梳と短き眞鍮の簪を挿したり。衣裳は
 見るにさへ羞かしければ、語るはなほの事この娘子の爲
 に氣毒なれど、淺黄の中形の浴衣は肩膝臂のあたり白み
 て、おき長の足らざるはなほの事つらかるべし。帯ハ昆布
 を縋りて巻けるやうあるを、鉤は無理に引延べたるを見
 れば、紅入友染の葡萄地のめれんそにて、腐りたる蔽膝は
 客の前とて巻揚げ、片手に給仕の縁缺盆を引附け、片手は

膝に措きて俯き、火影を避けむと横顔にありて坐れるに、
 容色よりもあは比類あるまじく驚かるゝは膚色の純白
 なり。雪も白けれど雪の純白にもあらず、玉には寒けき光
 澤あれどさるにも似ず、眞白の裏に暖氣を輾み、清めるに
 あらず、潤るにあらず、透明なるがごとく曇るがごとく。肌
 理濃に膩氣を帯びて、にも不可言一種の美色あり。青木恍
 惚としてわけもなく胸塞がり、咽喉を通らぬ飯を詰めて
 むやうに二膳までは入れたれど、口中に巾ばかりして味
 なければ箸を捨てけり。此時の感情何とも難道けれど、學
 年試験の席上に受験紙の配賦済みたる時の胸噪にやゝ

似たり。女子の恐ろしきもの、特別美しくしき女子と對坐ほ
 ど世に恐ろしきものなしといへる。朋友の言葉を今宵と
 いふ今宵のひとと思ひ中りて、無經驗なる男は何にして
 も物の用には立つまじきものと悟りぬ。れ薦は膳を退き
 てまた來り、床を延ぶべきやと問ふに、餘り蒸暑ければ少
 時涼みて後と、櫃子窓に腰を懸けながら下行くか薦を呼
 び、團扇をと望めば、心注かざりしを愧ぢたる面色にて、表
 坐敷の隅より古團扇を持來り、跪づいて手渡し、御寐なる
 時にのゝ呼びくださりましと梯子を下りぬ。筑波山中に
 て七絶の結句を得たれば、路々も之を纏めむと苦吟せし

に、疲るゝまゝに遺れたりしをふと憶出して、かゝる時にこそと轉句を案ずれど、風景眼前に浮ばず、工夫字中に入らずして、女子の事のみ頻りに想はれぬ。

夕飯の汁濃かりしゆゑにや、劇しく渴きて咽喉ひたと密着がごとく堪へがたければ、た薦を呼び氷水を取寄て三杯一息に飲めば、胸や、冷にて風腹中を通ふ思ひも少時、また、煎熬ばかりに渴けばまた二杯頼みけるに、お身毒なればとた薦は苦勞にして諫むるに、たのれも薬にはあるまじと思ひ留りけれど、いよゝゝ渴氣堪へがたければ、無理に吩咐けてその二杯も空にしけり。

時移るほどに天曇りて雲低く、戶外にも裸蠟燭の煽らぬまで、に風死して夜熱蒸すごとく、何もせで臥せる背に汗流るれば、青木は赤裸になりて大字に仆れ、蚊を逐ひながらうとゝと、と匿りしが、腹痛にたのづと目覺めて起上れど、浴衣をひとりして得被ぬばかり下痛腹み、起きてハ仆れたほれては轉け、のたうちまはりて呻く聲に、何事？とお薦馳あがりて此躰に仰天し、けた、ましく母親を喚立て俱々に介抱すれど、劇痛いさゝかも息まらず、なほ揉立て突立て腸を噛まるゝ苦惱に、顔色變じて身を悶ゆる様子にはもじや虎列刺かと、母親は怖れてどきまざり狼狽ゆる

二、
 に、た、薦、の、か、ひ、く、しく、看護、す、れ、ど、一、粒、の、丸、薬、だ、に、持、合、
 さ、ず、さ、れ、バ、と、て、薬、屋、へ、此、時、節、が、ら、あ、は、た、く、しく、腹、痛、の、
 薬、買、に、行、か、む、は、疑、念、の、種、を、蒔、く、恐、怖、も、あ、り、な、ほ、さ、ら、醫、
 師、を、呼、び、て、類、似、虎、列、刺、な、ど、い、は、れ、な、ば、我、家、の、迷、惑、は、
 と、も、あ、れ、此、旅、人、を、殺、す、が、情、あ、し、さ、り、と、て、薬、と、醫、師、と、の、
 外、に、急、病、を、濟、ふ、べ、き、方、法、あ、き、に、分、別、盡、き、心、狭、き、女、人、の、
 泣、く、に、も、泣、か、れ、ぬ、絶、命、の、淵、に、臨、み、母、親、の、斷、然、に、醫、
 師、を、呼、び、に、行、か、む、と、い、ふ、を、あ、薦、は、引、留、め、呼、吸、も、絶、々、な、
 る、青、木、の、耳、の、根、に、薬、の、お、待、合、は、な、き、か、と、叫、べ、ば、革、包、に、
 く、と、二、聲、心、得、て、母、親、に、革、包、を、解、か、せ、て、底、を、覆、せ、ば、天、

助、？ 寶、丹、の、一、包、母、子、見、よ、り、は、や、命、拾、ひ、せ、る、心、地、し、て、之、
 を、飲、ま、せ、板、の、や、う、な、る、薄、團、を、敷、き、二、人、懸、り、に、て、青、木、を、
 其、上、に、臥、か、せ、蚊、帳、は、邪、魔、な、り、と、釣、ら、ね、バ、あ、薦、添、附、ひ、て、
 蚊、を、拂、ひ、腹、を、壓、し、薬、を、勸、め、十、二、時、近、く、ま、で、母、も、看、病、し、
 た、り、し、が、苦、痛、も、少、し、は、薄、ら、ざ、た、る、様、子、に、あ、薦、は、母、親、を、
 寐、ま、せ、一、人、遺、り、て、懇、篤、に、介、抱、し、た、り、し、が、一、時、頃、よ、り、下、
 痢、を、催、し、便、所、へ、通、ふ、と、殆、ど、歸、る、を、待、さ、る、ば、か、り、な、れ、
 ど、そ、の、度、々、あ、薦、の、痲、者、が、起、居、往、還、の、杖、と、な、り、汚、穢、も、厭、
 ん、ず、深、切、に、世、話、し、て、徹、夜、に、疲、れ、そ、の、枕、頭、に、て、と、ろ、く、
 と、睡、る、間、も、な、く、母、親、に、ぞ、呼、覺、さ、れ、け、る、。

其朝になれば腹痛七分は簿らぎ、折々下痢のあれど人手をからず行歩に自左を得たれど、通夜の病苦に衰弱太劇しく、筋弛み肉軟れるごとく覺に、轉輾も懶く枕に仆れて呼吸急迫く、櫃子より吹入る麥の葉末の朝風を面にうけて心快くうつゝの裏、お蔭の昇り來るに目を開けば、枕近く寄り寄りて御氣分はと青木の顔を見るに、色青黒く眼凹落ちて光なく、頬骨の際立てるに驚き、お腹痛はと重ねかけて尋ねぬ。青木は枕に頭重ければ會釋心に軽く首肯した。蔭様にて腹痛も大分軽くなりました。昨夜の世話の噂へむかたなく、骨肉も及び難きお實情の歡喜の五臟

に徹へて……徹ふるばかりにて報恩もならぬ流浪の旅人、一樹の蔭とはいふもの、往けば還らぬ無縁のそれがしに何と思はれての御深切か。御心のやさしくも頼もしきに絆され、昨夜一夜が一年のごとく、今朝は此家に居馴染みて更に旅中の想をあさず、此方をも他人とら思ひ難し。例の疾病にて無殘や他國土になる事かと、身も世もあられず心細かりしが、唯水あたりにて命拾をしたり。や、快氣けれど今日の發足は覺束なければ、御迷惑の察すれど今宵の一泊をゆるしたまへ。明朝ともならば勉めても出立べしといへば、その御遠慮の御無用になされまし

て、かく汚穢き家だに御辛抱なるものならば、ゆるく御養生あるばしまし、届かぬながら御看病まうしましよ。これ言葉の難有けれど階下への用事もあらむに頼む事あらば手を鳴らさむほかに、繁忙中を附添はるゝに及ばずと遠慮を言へば、晝間は容あければ間暇なれば看病してあげよと母の吩咐もあれば隔心なく御用をおほせられましてと、立たぬの青木も望む所なれど、嬉しさと羞しさに氣味悪く身を縮めて、壁を向けば顔も見たく、顔を見れば面羞く、夜衣を被れば切なく身の措置に苦しむ退屈紛れに一ツ二ツの雑談が發端にて、其日の中に隔心のなく

なりぬ。骨肉の母だにもかうまでと思へるゝ、注意の周到なる看護に、青木の心解けて蕩けて他人行義失せて、表座敷に客あり階下に用事ありても、枕頭を立たす事を悦ばず、さもなきに事々しく手を打拍ぎて呼寄せ、用ひなけれど居てくれといへば、今の間用を濟ませてゐるりと来るほかに少時の辛抱をしたまへとて、行くか行かぬに手を鳴らせば、またしても用事はないにぞ知りながら懊惱く呼ばるゝを結句悦び、我まゝをいひたまふなとわざと叱責に来るがうれしく叱責るゝがうれしく、青木の心には是來識らざりし一種異様の感情萌えけるが、いつ

しか胸一杯に蔓延りて常に胸部に搔かれぬ痒氣あるが
ごとし。

此夜は表敷座に客ありてやうやく十一時頃に来り青木
が枕頭にてわけもない事をかたり合ひ何が嬉しくてか
相互の面に和氣溢れてひろく話の種をよくも盡きず
二時過ぐるまで語續けぬ。明朝は青木の顔色復り元氣常
のごとく食欲復して無病の人となりける様子なれとな
は床を離れず物身たるくして十分本復とも思はれざれ
ば、今日一日の厄介を頼むと見舞に来し母親に告げて、其日
もた薦を片時離さゞりき。我人に聞かまほし、南軒露座の

夕思ひかけず月影の明かあるに心躍りて酒を酌めば、月
盃中にふはと落ちたらむ時の思ひいかあらむ？ 其盃の
放しがたかるべし。戀に無雅なる青木も此盃は放し難
く、苦惱なき腹痛の長く癒えずして、此家に逗留の便宜と
もなれかしと祈るにかひなく、この一時の暑氣中は洗ふ
ごとく癒はけるに、此地は人の長く逗留すべき名所にも
あらず、此家もまたさるべき旅宿ならぬに、口實もなく滞
在せむの母子の所思も羞かしく、よし其は忍ぶにしても
此女子に契らむとまでの心はなきを仇なる戀に繋かれ
何々まで在らむも同じ事なるべしと、攪眠てふと其氣に

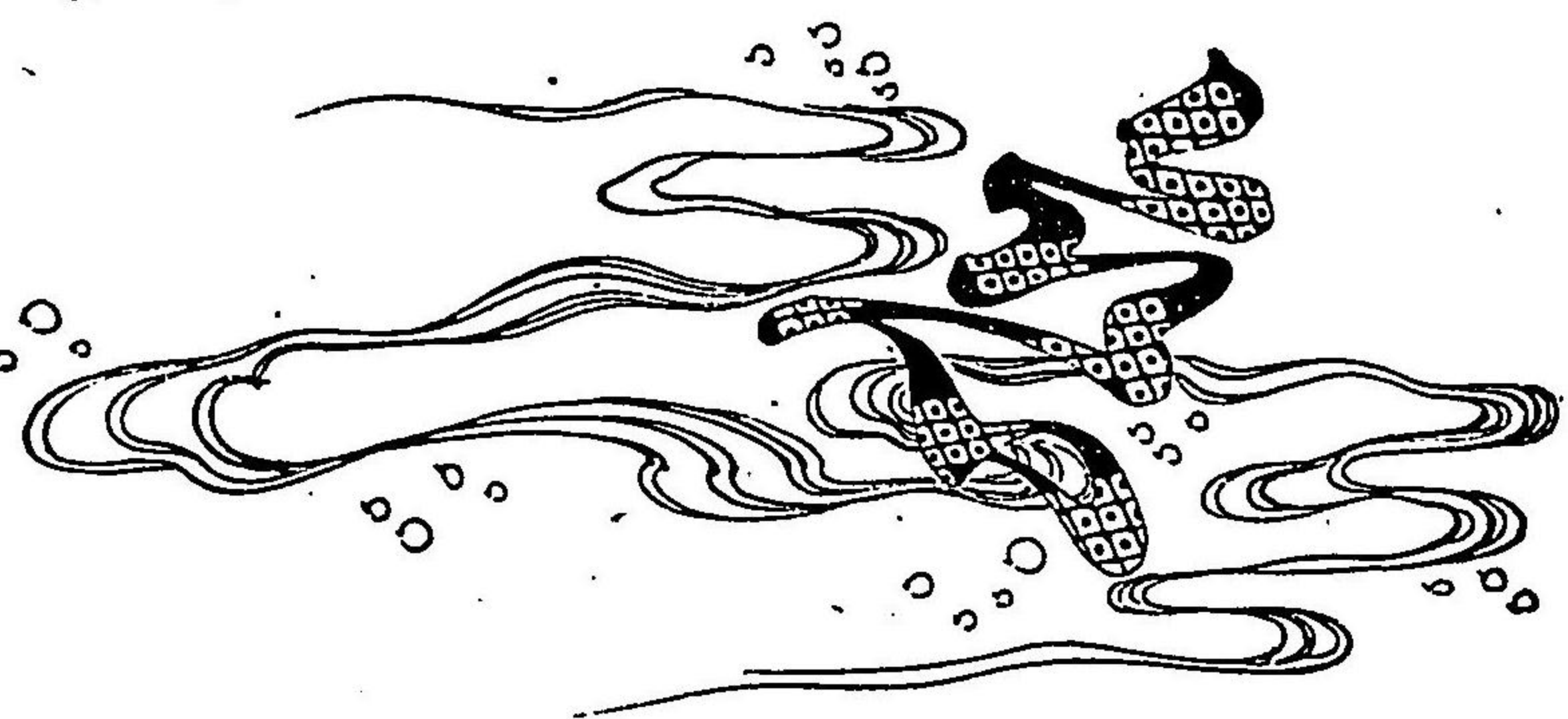
なり、手荷物てにものの用意よういする所ところへ、お蔭かげ來合きあはせ、何所どこぞへ行いか
る、かど不審ふしんを立つるに、東京とうきょうへ還かへると手てもなく言放いばなつ
顔かほをえつと視みて、もはやね還かへりかどばかり、事の意外いざいに呆まど
れたるよりはむしろ恨うらみを籠かこたる短たん句くなり。此裏このところに悲愴ひさうの
調子てうしありて痛いたく青木あおきの心こころに染しみ、何なにともいはで顔かほを見みか
へせは、俯首うつむきて萎しる、風情ふうせいに愛憐あいれん動うごき、さまでに思おもふも
のをと軟懦やわやわ出いで、慰なぐさめむ言葉ことばを考かひがふる間まにお蔭かげの立たち
けり。やがて朝食あさめしの膳ぜんの母親ははが運はこび、女子むすめの飯櫃いひぐらを持もち來きり、
今朝けさほどの御全快ごぜんくわいのよしと、母親はは慶賀けいがをいひながら様子ようす
を見みて今朝けさの御出立ごだてかど問とへば、青木あおきの顔かほに凝こらせるお

蔭かげが眼裏めうらなる無言むごんの語ことばに、青木あおきの決心けつこころ鈍にぶりて、大平山おほひらやまへ行い
かむと思おもひしが、今日けふも此様子このようすにて、暑氣しよき劇げつしからむほ
どに、病餘びやうよの身みに恙つかやあらむと思おもひ止とどりたりと聞きく、お蔭かげ
の眼めにいはれぬ喜色しよしよく浮うかびたるを、已なほも識しりてや羞はづかしげ
に俯首うつむきぬ。
母親はははさりとも識しらずなるほど、御病氣ごびやうき餘あがりなれば、炎天えんてんに
出で行き、悪あしかるべし。快方くわいほうとて心こころを忽ゆるされまば大事だいじに及およ
ぶべければ、ゆるりと御養生ごじやうじやうなされまして、立たち行いく後あと
に、お蔭かげのいそくと膝ひざを進すすませ、ようぞ思おもひ止とどつて下したさ
れました。お發足はつそくと聞ききし時は、どうせうかと思おもひました

と、行懸りの旅人をさまでに懐しがりて、未の何とせむ心
なるか。青木の此言葉に女子が所爲を照合のせて、我に心
なきにもあらざる事と判ずれば、何といふ目的はなけれ
ど心牽れて離れがたく、飲みもせぬ薬を買はせて母親の
手前を繕ひ、例の通り看病をとて側に引附け、二人會まり
て何の仕草もなきに、この長日を短かく暮しぬ。

下の巻

其日暮二人榎子に腰懸けて涼みける
が、格子の外をゆらゆらと螢の過行く
を、お薦團扇に招き寄せ、手攫にしてこ
れと青木に差出す手首をじつと握り
て、娘子に摺寄りざまに邪魔なる燈を
吹滅し、星影の薄くらがり顔に寄せ
て、お薦を覗けば、否にはあらぬか聲を
も立てず、耳の根火のこくと頬に觸れ
ければ、此所ぞと青木は握りし手首を





川 波 巴

ひ懸けむ言葉なくて手持無沙汰に控ふれば娘子のなほ
 酒狂か過失か悪戯かなんどのやうに謝罪もしにく、い
 からに花の蕾を剥きたる心地して氣の毒に覺はけれど、
 覗へばなほ上氣して眼の上下薄紅に耳根の眞赤を見る
 と、煙草盃に顔をさし寄する間に、行燈を點すゝ蔦の顔を
 火けむとする時ゝ蔦昇來るに、面は色ければ見せじ見じ
 を持て來る様子になほ希望ありと心を落着け、煙草を移
 まじと階下を暇げに風の爲に火を取られたりと擦切木
 ごとく梯子を下りぬわが無禮に驚きもはや昇りて來
 りしが梯子に人足の聞ゆるにばつと離れ、蔦は脱兎の
 離れ、蔦は脱兎の

羞て居愁くよそくしく下りむとするを小聲に呼留む
れば、はいと此方を向きて手を支ふるを此所へくとい
へば、つひぞなき顔を脊けてうぢくするをもどかしく、
立て手を引きまた榎子まで伴來りしが、怖くてまたと手
だしはせざりき。

青木が心中に芽ぐみたる戀の、一時ごとく慕るを制せむ
ともせざればいよく慕りて、眠のやゝ戀に光り鼻息の
やゝ戀に鳴り、機會もあらぬ飛懸からむと爪を藏せど、お
蔦の溫柔裏に四面四角の氣ありて、つけ入るべき妖淫を
見せねば、十分我に落つべしと見あがらも、はづかしき

事を仕懸けむ、曉萬一其人に心無からむに合はずべき
面なしと、淫行に物馴れぬ男の良心に負け良心に勝ち、そ
の争鬭に胸中轉到して、斷行？斷念？兩岐の分別に迷ひ
ぬ。

されど乗りかゝりたる船のごとき想ひしてこのまゝ捨
て還る心なければ、病餘の不快に托して逗留六日になり
ぬ。とりとて戀の仕草の少しも抄らで、盤をとらへし夕に
さして、異なることなし。唯それとはなしの青木が日々の
所爲の謎を、お蔦も解きて憎からぬ思ひの募れるにや、と
やかく母親を瞞着て、青木が側を離れじとばかり言らふ

心情の美味を忘られず、此間に旅費の底をはたくばかり
 となれど、なか／＼還るのかの字も想はず。いよ／＼窮り
 て東京なる親友に手紙を寄せ、小額の爲換を強願りて辛
 くも旅費を調へたれば、もはや泣いても笑ふても明日の
 離別とお薦に語れば、留れともいねば行けともいので
 唯鬱々を見るに、ふりすて、還る心はなけれど留まるべ
 くもあらず。長々うけたる世話の禮やら、身を大切に一人
 の母に孝行せよといふ事やら、縁もあらば再會はむとい
 ふ事やらこま／＼と語れば、お薦は泣いて更に物を言
 はず、再會期しがたき別離かと思へば、青木も胸塞がり、晩餐

も食はで思案にくるゝこそ不便なれ。
 我思つひに霽れず、我戀つひにかあひざる事か。それも切
 なし。此も切なきの、愛情の鋸に綴着られて微揺もならざ
 るを、無體に引放されむ離別の惜さ、心細さ、悲さいふ方な
 し。お薦は失神して言も發ねば、身も動かさず、壁に向ふ
 て折々吐息を洩すのみ。
 これまでにして本意を果たさざるも、畢竟の我氣の脆弱
 かならなり。馬には御て見よ、此ま、事もなく別れての後悔
 へ、一生胸に曇の病ともなるべし。どにもかくにも今宵は
 かならず首尾を運びむものと心を定め、夜深に隣室の客

の寢息をばかり、便所へゆく風して、朧が臥床を蚊帳越
 に覗へば、足音に顔を此方に向くる、これも寝ぬかとい
 としく、小手招して二階へ還れば、續いて昇來るに、顔愁思
 に、寒れて色蒼く、しよんぼりとして、影も薄く見たり、青
 木満心の勇を鼓して、矢庭に燈火を吹滅し、有無をいはせ
 ず契りぬ。

けた、ましき喚聲に驚きて、青木攪眠せば、枕頭に母親半
 狂亂になりて、蕪が家出と泣聲に喚かれ、なほ夢かと、刎起
 るしだらなき懷中より、ぱらりと落つる一通、南無三寶書
 の！

一筆かきのことし申し、わたくしは今夜うづま川へ身
 をなげ相果て申し、なくなりぬ、後々までもきつと愛
 想づかしの種と思ひぬへ、今までは深くつゝ、みを
 りぬへども、わたくし事は淺ましき病の片輪ものゆ
 え、一度男に肌ふれぬへば、一時に病發りて、見さへい
 ま、いしき容に相成ぬ、因果のうまれとて、かたく男を
 恨みをりぬひしが、いかなる御縁にや御情のほど身
 にしみく、と嬉しくおもひまぬらせぬへども、疎ま
 しき姿に相成ぬ、生がひのあき耻さらし、とても
 思ひあきらめむといろく、に心を叱りぬても、お顔

を見るたびにもかきさまさり、思ひきる氣に相成不
申へば、命を捨て、御情にあづかり申す。日頃のつ
しみを破りい上からは、今にも顔はくづれ眉毛の
ぬけて、二目と見られぬ姿に相成り、世間に疎まれ
い事が今より思ひやられてつらくいまゝ、いつそ身
を投げい覺悟いたし思ひ染めし御前様に願かな
ひいわたくしの命はさらく惜しくいいねぞ、頼
みなき母一人を遺しおきいへば、あすからいたより
を失ひ苦勞をいたしい事眼に見るやうにて、それの
みが今はの際の氣懸りにござい。わたくしととき因

果もの枕を御かけしなされいは御身のけがれと、
つゝみかくせしわたくしをさぞかし御恨みなされ
い事を申譯なくいへども、唯一夜の御情もえに命も
捨ていに死じ、どうぞ御ゆるし被下度い。先日いた
きい御名札を肌身につけ相果ていむかどぞんじ
いへども、御名前にもかゝるることゝぞんじ、此末に
まきこめおきいへば、まん一わたくしの死がい見あ
たりい、葬式の折は棺の内へ御いれ被下度、申上げ
たき事は胸一ばいいへども、とりいそぎいもえ惜
き筆とめまぬらせい。一たんのいたづらから先立ち

まする不孝の罪は、なんとも母様へ申譯なく、あまり
とや面目なさに手紙をさしあげひこそわざとえん
りよいたし。御前様よりよしなに御わび被下度、わ
たくしの身なげいたし。は、まつたくわたくしの迷
ひからにひへバ、かあらず。青木様を御うらみ被
下まじく母様へ頼み上中。たしつけがましうへ
ども、わたくしなき後は便りなき母様を他人とあば
しめさず、行末ながく御つきあひ被下度、ねがひ上げ
まぬらせ。あら。く。し。

十五日

五十

つたふ

青木さま

巴 波 川

巴波川(畢)

五十一

愛讀者へ謹告

當號外へハ紅葉山人及露伴子兩君の新著を掲載致さるに
て其旨一二新聞紙へも廣告致置表紙も出來候處本月に至
り突然露伴君より今回の間にハあはぬ故當號外へ著作掲
載致す事はゆるしてくれとの事早發行期に迫り俄の御斷
り故紅葉君著二種を出版致すとハなれり去れハ紙數通
常の號に比してハ少く候然し其代り同君著出來の上ハ
十二號以下の本號へ附録と致し可申候間此段御諒承被下
度候也

吉岡書籍店

新著 百種

一號より十冊又十一號
 十冊金一圓十錢郵
 税十錢御注文の方
 號外一號無代價にて
 進呈すべし

廿四年一月八十二號として
森歐外漁史の

新著と

十一號は虚心亭主人の
妾薄命

去十一月出版致候

書籍受責廣告

弊店にては専ら出版を主とし受責は不致居候處續々賣捌
 方御依頼相成情實御断申兼る向も有之に付更に受責をも

始め御小書とも精々廉價に差出可申候間多少とも御注文
 被下度且又御蔵版書賣捌方御申付被下御依頼の書籍は毎
 月當新著百種へ廣告致し可申候

●逸品畫鑑第一卷 郵税共六十錢
 非凡なる古畫を會集し彩色彩圖に致したる極上美麗な
 る本なり

紅葉山人序 ●石点頭著 ●芳年畫
 女人

●禁制きむすこ 郵税共金二十錢
 面白き小説にして男女同體を排撃せるものなり

佐藤定介 ●鼻山健二氏校正

●百家説林 金三十七錢
 有名なる隨筆を集めたるものなり

小田清雄氏補註 ●男爵津守國美公閣

●國文全書(湖月抄) 一冊 金二十四錢
 郵税三錢宛

全 次編 土佐日記考証 手取物語抄 全
 湖月抄は八冊にて終る次編は有名なる物語を掲載す

後藤伯題字勝伯序文 ●林包明氏著

●帝國議院論策 一冊 金三十錢
 郵税四錢

帝國の國會を論ずるものは一讀あるべし

米國人デニー氏著

●清韓論 金三十錢
 郵税四錢

デニー氏韓庭にあつて此論を作れり

吉岡書店雜誌部廣告

左の諸雜 へ本社同様の代價にて迅速に送達仕候各社別々に注文の煩を省き候
 間續々御注文を乞ふ又御賣は特別割引致候

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|
| 日國友評 | 日國論友 | 天國則論 | 國國本評 | 新國本評 | 法法判令 | 裁法義義 | 民法義義 | 商法義義 | 富國義義 | 日國義義 | 大利國義 | 大法國義 | 新法國義 | 百新國義 | 都百新國 | しがらみ | | | | |
| 醫學會誌 | 地物學會誌 | 動物學會誌 | 人類學會誌 | 法學協會誌 | 哲學協會誌 | 順智會誌 | 逸品會誌 | 國品會誌 | 吾妻會誌 | 新作會誌 | 女學會誌 | 聯合會誌 | 團家會誌 | 大日本會誌 | 日國會誌 | 錦文會誌 | 文海會誌 | 東海會誌 | 雅則會誌 | |
| 經濟學會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 | 學事會誌 |
| 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 | 教育會誌 |

銀洋白

かんざし御賣

兩國若松町 萬屋伊太郎

廣告

弊店へ向け御注文被下候際或は出名を御記載なく單に何か月前金など、御申越有之甚た困却致候間必ず書籍雜誌の名御記載を乞ふ
 豫約者諸君御移轉の時必ず舊御宿所を新所名と合せ御報知被下度候
 郵券代用の御断申上候得共無據場合にハ一錢又五厘券にて代用一割増御拂有之度候御宿所ハ必ず楷書にて御認め被下度候前金相切候節ハ何雜誌に限らば弊店も送達の方ハ必ず御姓名を朱書致候間別に前金相切候由御報にハ不及候

吉岡書籍店

毎月一回發行

一冊 十二錢

十冊 一圓十錢

廣告料一行

版權所有 (當號外十錢)

明治二十三年十二月廿五日印刷
 全年 月全 日出版

編輯人 山田悦

東京神田區南乘物町三番地

發行人 中根安隆

東京深川區一色町十二番地

印刷人 吉川小三郎

東京神田南乘物町

賣捌所 吉岡書籍店

郵税一錢

郵税十錢

十錢宛

古書保存會廣告

古書保存會叢書奇書百種第一卷

紅葉山人尾崎德太郎氏訂正

目 一 代 男

色道懺悔男

次 傾城色三味線

古書保存會叢書玉石集第一卷

目次逐頁廣告可致候

東京神田南乘物町

吉岡書籍店內

古書保存會

貯春樓
受教子

